



概要報告 9

# 市道鈴鹿楠線改良工事に伴う

## 埋蔵文化財調査概要報告

—大木ノ輪遺跡—

1986・11

鈴鹿市遺跡調査会

## I. 前 言

昨年調査を実施した上箕田城跡（推定）と同様に、市道鈴鹿楠線改良工事区域内に周知遺跡の大木ノ輪遺跡が所在するため、文化財保護法の規定 1 ヒ基いて事業担当課である土木課と遺跡の取り扱いについて協議がもたれ、その結果、工事着手前に発掘調査を実施して、地下遺構の埋設状況を明らかにし、記録保存を図ることになった。

調査にあたり、その手続きとして事業主体である鈴鹿市は、文化財保護法第 57 条第 3 項の規定により、昭和 61 年 6. 月 12 日付、鈴土第 1897 号をもって、文化庁へ発掘調査に係る通知書を、調査主体の鈴鹿市教育委員会（遺跡調査会）は、文化財保護法第 57 条第 1 項により、昭和 61 年 12 日付で文化庁へ発掘届出書を提出した。

調査は鈴鹿市遺跡調査会（代表、鈴鹿市教育委員会教育長神尾博）が鈴鹿市（鈴鹿市長野村伸三郎）と委託契約を締結し、昭和 61 年 7 月 25 日から 8 月 18 日まで（実働 15 日間）調査を実施した。

なお、発掘調査にあたっては、地元関係各位ならびに、浅尾悟（鈴鹿市立神戸中学校教諭）、増崎秀敏（鈴鹿市立天栄中学校教諭）、垣見博一（三重県立四郷高等学校教諭）の三氏から休日を返上して調査協力をいただいた。記してその厚意に謝意を表したい。

## II. 位置と歴史環境

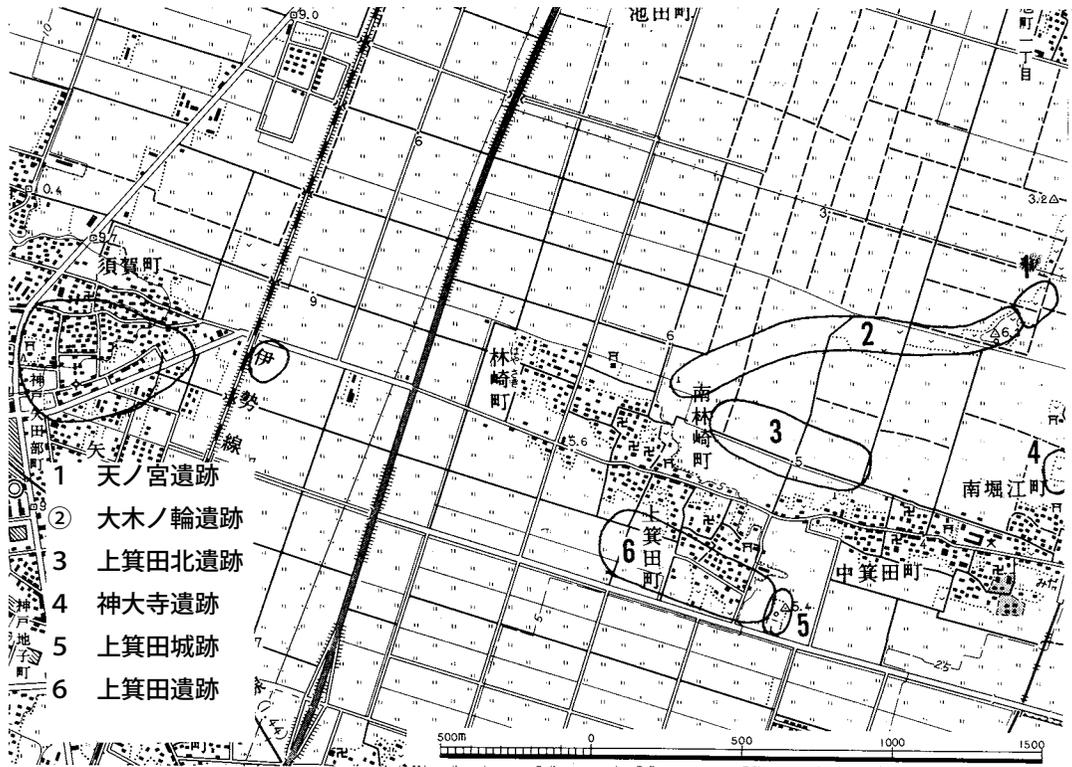
鈴鹿市は、下流域でいく度も流路を変え、肥沃な沖積平野を形成してきた。その沖積平野に所在する古代遺跡は、標高 3m ～ 6m の鈴鹿川旧河床の自然堤防上に所在する。大木ノ輪遺跡も、県天然記念物「長太の大樟」の周辺に発達した自然堤防列上にあり、巾約 40m、距離にして約 400m にわたる広範な面積を有する。周囲の水田との比高は約 2m あり、地目は畑地として利用されている。行政的には鈴鹿市林崎町字大木ノ輪・上箕田町字石神・字石磯にまたがっている。

当遺跡は、過去において林崎東方遺跡と呼称されていたが、昭和 54 年の県営圃場整備に伴い調査される際、大木ノ輪遺跡と改称された。その調査により、平安・鎌倉時代を中心とした古代集落跡であることが明らかにされ、多数の緑粕陶器の出土も注目されたところである。

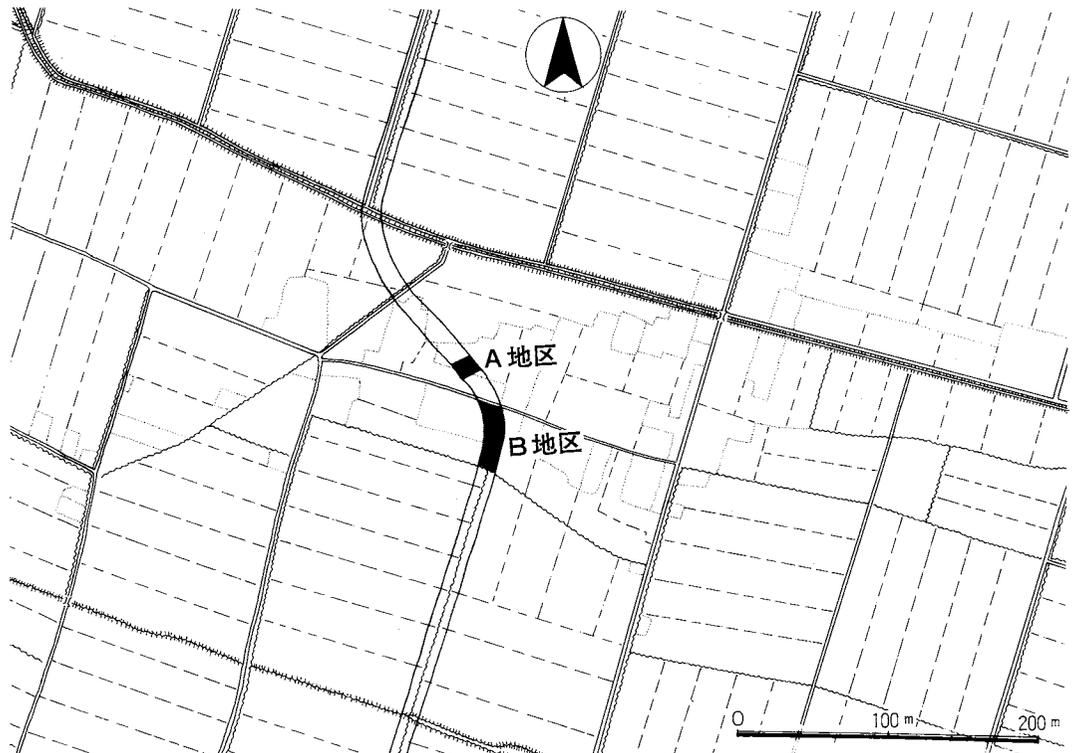
大木ノ輪遺跡と同様に自然堤防上には、多数の古代遺跡が所在する。人物が鹿を射る線刻画を描いた壺が出土したことで著名な上箕田遺跡（6）は、北伊勢地方で最大規模を誇る弥生時代の遺跡である。同じ弥生時代の遺跡として、直ぐ北側に上箕田北遺跡（3）が所在する。

昭和 55 年の圃場整備事業により調査された天ノ宮遺跡（1）は大木ノ輪遺跡の北に続く古代集落跡で、古墳時代前期の土師器がまとまって出土している。神大寺遺跡（4）からは、この地方では最古型式に属する須恵器がまとまって出土している。

奈良時代には、条里制が施行されるとともに、当地域は河曲郡賀美郷に組入れられる。



大木ノ輪遺跡の位置および周辺の遺跡 (1 : 25,000 鈴鹿)



発掘区平面図 (1 : 5,000)

大木ノ輪遺跡の各地区から検出された溝跡は条里遺構との関連が窺われるところである。

平安時代には、いくつかの御園・御厨が成立したことが文献にみられる。箕田遺跡、大木ノ輪遺跡から出土した多数の緑釉陶器は、他地域に較べこの地域が一段と開発が進んでいたことを物語る資料といえるだろう。

室町時代には、この穀倉地帯を拠点として伊勢守護土岐氏が上箕田城(5)を築いたと言われる。昨年推定地を調査したが、城跡に関連する遺構は検出されなかった。

### Ⅲ. 調査の方法

道路を挟み、北側をA区、南側をB区と呼称し道路敷地範囲に限って調査を計画した。まず雑草の伐採から始まり、A区に1箇所、B区に2箇所の試掘坑を設定した。A区からは礎石建物の一部、B区からは、山茶碗・山皿等多くの遺物と多数の柱穴・溝跡を検出した。こうしたことから、道路計画範囲内全面の調査の必要性が生じ、表土除去については、重機を使用し、その後、順次地山面まで掘り下げる作業を進めた。

A区については、道路計画面積10m×70m(700㎡)を調査対象面積とした。

### Ⅳ. 遺 構

A区周辺部は掩乱があり、4m×7m(28㎡)の小さな発掘区にとどまった。

**S B 1** 表土下約20cm～30cmの砂質性に富んだ：茶褐色土層の中から扁平な河原石を利用した礎石建物の一部を検出した。全体の規模は明らかでないが、2間×4間以上の総柱建物と考えられる。柱の掘り方は検出されず、川原石をただ据えた状態である。川原石は、径20cm前後の小さなもので、上面は平坦となるよう設置している。柱間は約2.1m(7尺)である。南側柱両端と中央部では、約10～15cmのレベル差は認められるが、柱筋が通っていることから建物跡と考えた。周辺から山茶碗片・山皿片等が出土している。

B区70m×10mの細長い発掘区である。層序は大溝(SD3)を境に異なり、北側では包含層と考えられる黒褐色の砂礫層から地山の黄褐色砂礫層につながる。南側では、包含層・地山面とも茶褐色の粘質土となっている。

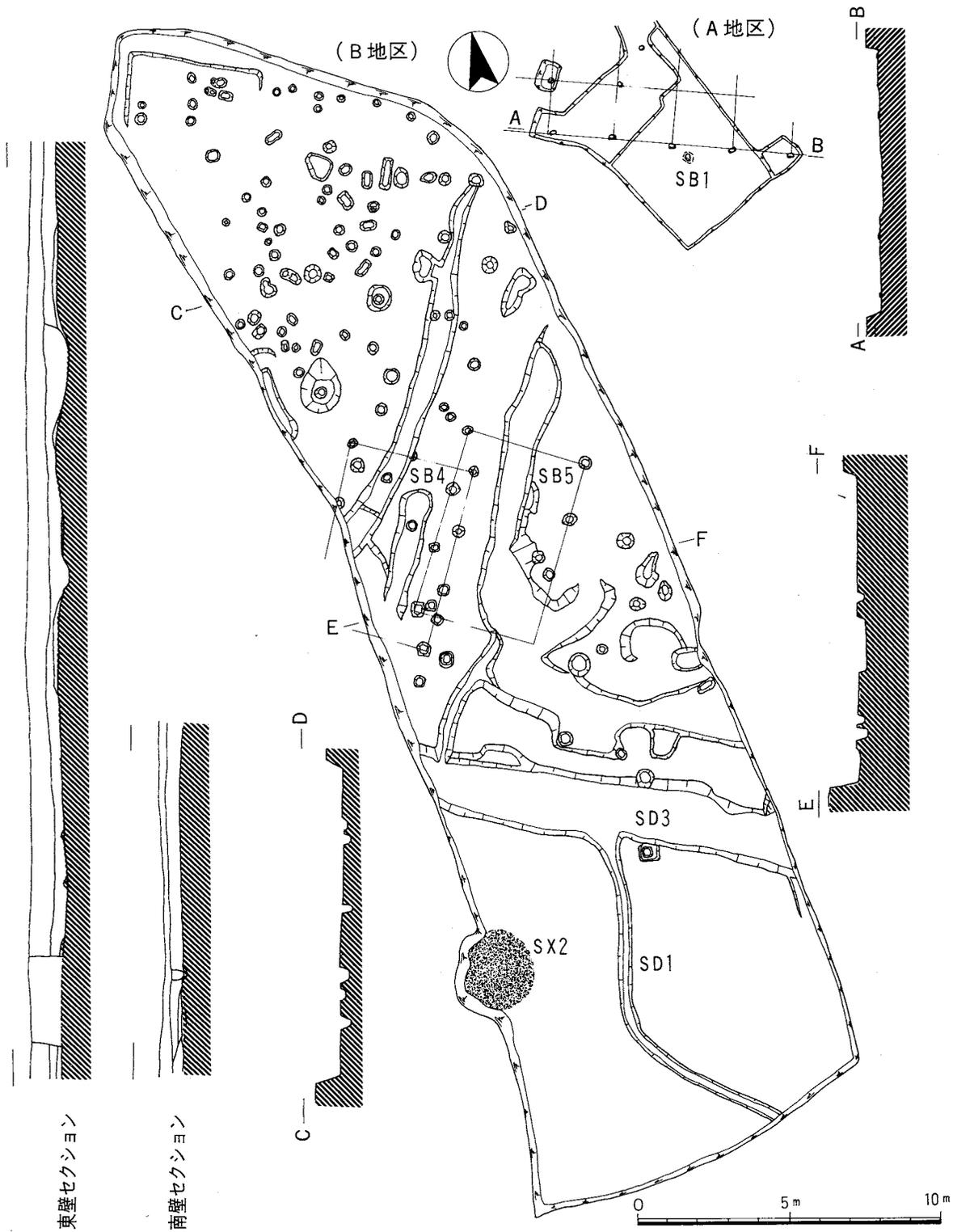
遺構には、建物跡・土拵・溝跡がある。

**S D 1** 発掘区の南側からゆるやかなカーブを描いて北に延びる巾20m、深さ25cmの細溝。埋土は灰褐色の粘質土で、弥生時代後期の土器片が数点出土している。

**S X 2** 発掘区西南壁に接したところであって、山茶碗・山皿と土師器皿の他、砥石二点が一括して1.5m×1.5mの範囲に投棄された状況で検出された。

**S D 3** 北西から南東に延びる巾2m、深さ1mの大溝で、埋土は黒褐色の砂質土。最深部で湧水が認められた。山茶碗片、山皿片が出土している。

**S B 4** 棟方向を北西にとる2間×3間建物。柱掘り方は円形で径20cm～30cm。深さは20cm前後で埋土は黒褐色の砂質土。山茶碗片が出土している。



遺構実測図 (1 : 100)

S B 5 SB4 と重複する 2 間× 3 間建物。妻側柱の中央部は溝と切り合い、いずれも明らかにできなかった。棟方向は SB4 と似ている。

## V. 出土遺物

出土遺物には、弥生時代後期の壺・甕類と鎌倉時代の山茶椀・山皿の日常雑器のほか、砥石・土錘等の生活用具がある。量的には、山茶椀を中心とした鎌倉時代のものが圧倒的に多く、弥生時代のものは非常に少ない。

前者は、A 区の包含層と考えられる黒褐色の砂礫層から、比較的まとまった状況で出土している。後者は、A・B 区の表土・包含層の各所から検出されているが、なかでも A 区の黒褐色砂礫層からの出土が際立っている。

### 1. 弥生時代の土器 (1～5)

#### 壺型土器 (1・2・5)

1 は球形を呈した体部と「く」の字形に外傾する口縁部とからなる壺型土器。体部外面は丁寧にへら磨きされ、内面には粗い下方から上方への指頭による調整痕がみられる。頸部には、細かな刷毛目が施される。胎土は細かく緻密。

2 は丸い体部からほぼ垂直に立つ口頸部と受口状の口縁につながる壺型土器。肩から口縁部までは、櫛状工具による刺突文と縦・横の刷毛目調整の文様構成である。内面には、細かい刷毛目が施されるが剥落は著しい。色調は茶褐色。四日市・西ヶ広遺跡から同器形のもの出土している。

5 は口縁端部が下方に肥厚して、外側に面をなす広口壺。内面には、羽状の刺突文を施す。色調は淡褐色。

#### 甕型土器 (3)

3 は口縁部が受口状をなす甕。肩から口縁部まで櫛状工具による刺突文と横線文を施す。内面は粗い刷毛目調整。胎土は砂礫を多く含み、色調は黒褐色。

#### 台付椀 (4)

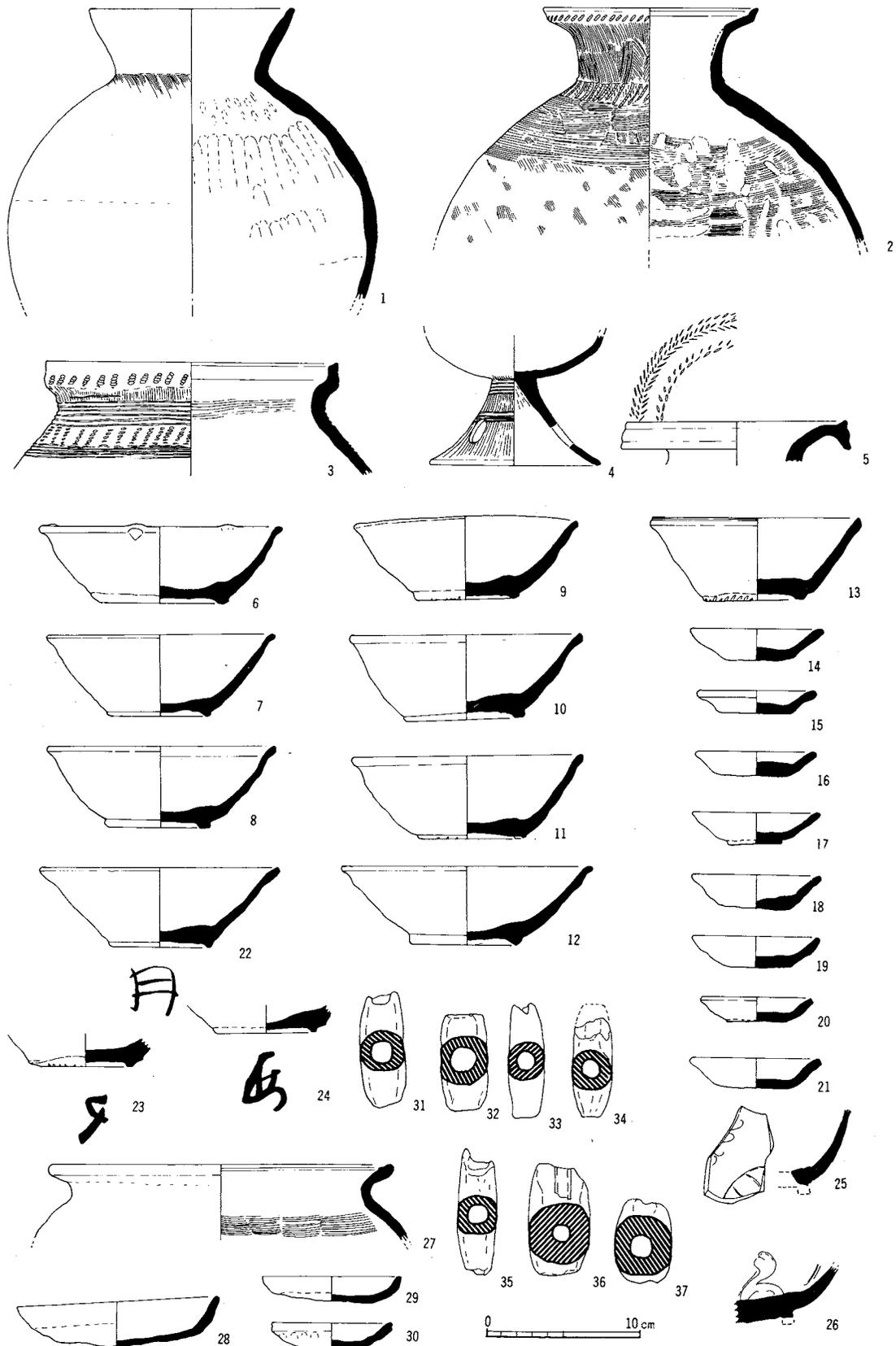
4 は大きく「ハ」の字状に開く脚部と丸い体部とからなる。脚部は丁寧にへら磨きされニケ所に横線文が施される。

### 2. 鎌倉時代の土器 (1～30)

#### 山茶椀 (6～13)

口径 14cm、器高 5.5cm 前後で、体部にわずかに丸味をとどめているタイプが目立っている。高台の調整・貼り付けは雑で、口縁端部の仕上げには、わずかに外反し丸くおさめるもの (6・7・11・12)、尖り気味のもの (9・10・13) と差異が認められる。

6 は口径 16cm、器高 5cm の比較的浅い山茶椀。口縁には三ヶ所の輪花がつけられ、端部はわずかに外反し、丸くおさめられる。胎土には砂粒が多く、色調は灰褐色。



出土遺物実測図 (1 : 4)

13は体部に丸味が消え、直線的にのびるもの。口縁部は尖り気味におさめられ、出土した山茶碗のなかでも、最も新しい時期に属する。

#### 小皿（14～21）

口径7.8cm～8.6cm、器高1.5cm～2.1cmの範囲に入り、高台が退化・消滅したものが多く。口縁部のつくりも、山茶碗と同様に尖り気味のものと、丸くおさめるものの二態がある。

18は内面中央部を指ナデにより凹むもの。19の内面には煤が付着して真黒である。

#### 青磁碗（25・26）

青・白磁の小片を含めると11点出土している。そのうち白磁片は1点のみである。25・26は青磁片の底部で花文が見られる。26の底の厚みは1.2cmと非常に厚い。

#### 土師器（27～30）

土師器には、鍋・杯・皿がある。その中で杯・皿の出土は目立って多い。

#### 鍋（27）

27は口縁端部を内側に折り返し、小さな凹面を持つもの。体部外面には、指押えにより凸凹が目立ち、煤が付着する。内面には刷毛目が施される。

#### 杯（28）

28は口径13.5cm、器高2.8cmで、ややいびつな器形のもの。体部中央部から、口縁部まで横ナデにより、他は指押え成形。胎土は緻密で、色調は灰褐色。

#### 皿（29・30）

29は口径9cm、器高1.5cm。口縁端部は横ナデ。体部は指押え成形。

30は口径7.9cm、器高1.6cm。27と同様に口縁端部は横ナデ。外面は指押え成形。色調は赤褐色で焼成は堅い。

#### 墨書土器（22～24）

墨書土器が6点出土している。いずれも、山茶碗の底部に、文字・符号が記されている。22は非常に細い文字で「月」と判読できる。23は文字、符号とも判読できる。24は墨に濃淡があり、文字をなぞっているようにも見える。この他符号で「×」印と考えられるものが数点ある。

### 3. その他の遺物（31～40）

土器類の他に、砥石・土錘が出土している。

#### 土錘（31～37）

両端が細く、棒状のもの（31・33・34・35）と前者に較べて太い円柱状のもの（32・36・37）がある。36・37は胎土に砂礫を多量に含む。

#### 砥石（写真38～40）

38は23cm×75cmの棒状に長い砥石。39は2面が使用され、断面三角形を呈するもの。40は3面が使用され、断面が薄い円盤状をなす。

## VI. 結 語

大木ノ輪遺跡は、昭和 54 年の県営圃場整備事業に伴い三地点が調査され、平安・鎌倉時代を中心とした集落跡であることが明らかにされた。

A・B 地区では井戸跡・溝跡を中心とした遺構に建物跡が加わり、C 地区では建物跡と溝跡が組み合わさる。調査地点により集落の構成も様々である。

今回の調査地点は、A・B 地区のほぼ真中に位置し、遺構には弥生時代の溝跡と鎌倉時代の溝跡・建物跡がある。調査面積が限られ全容は明らかでないが、C 地区の様相に似た区画をなしている。

出土遺物には、弥生時代の壺・甕類と鎌倉～室町時代の山茶碗・山皿と土師器の皿・杯・鍋類がある。

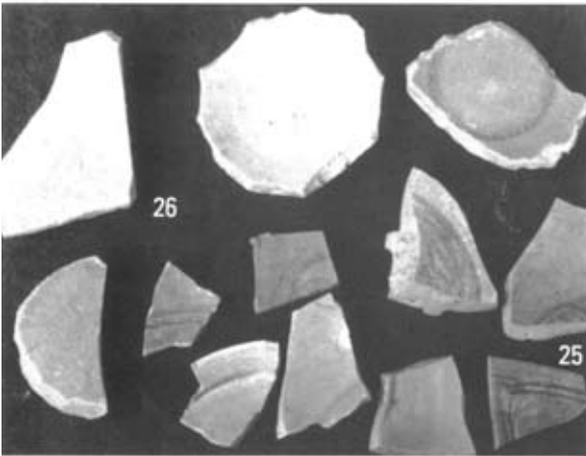
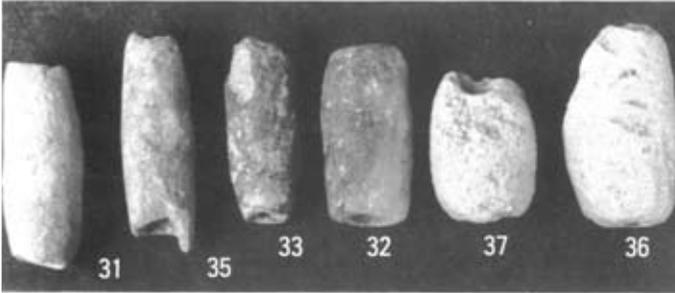
弥生時代の土器は数点であるが、上箕田 IV 式に比定される後期のもので、大木ノ輪遺跡の各地点から出土している。遺跡の北に位置するほど時期がさかのぼる傾向を示している。鎌倉～室町時代の土器は山茶碗・山皿類が 7～8 割を占め、他は土師器の皿・杯類で鍋は数片と少なく、羽釜類は一点も出土しなかった。

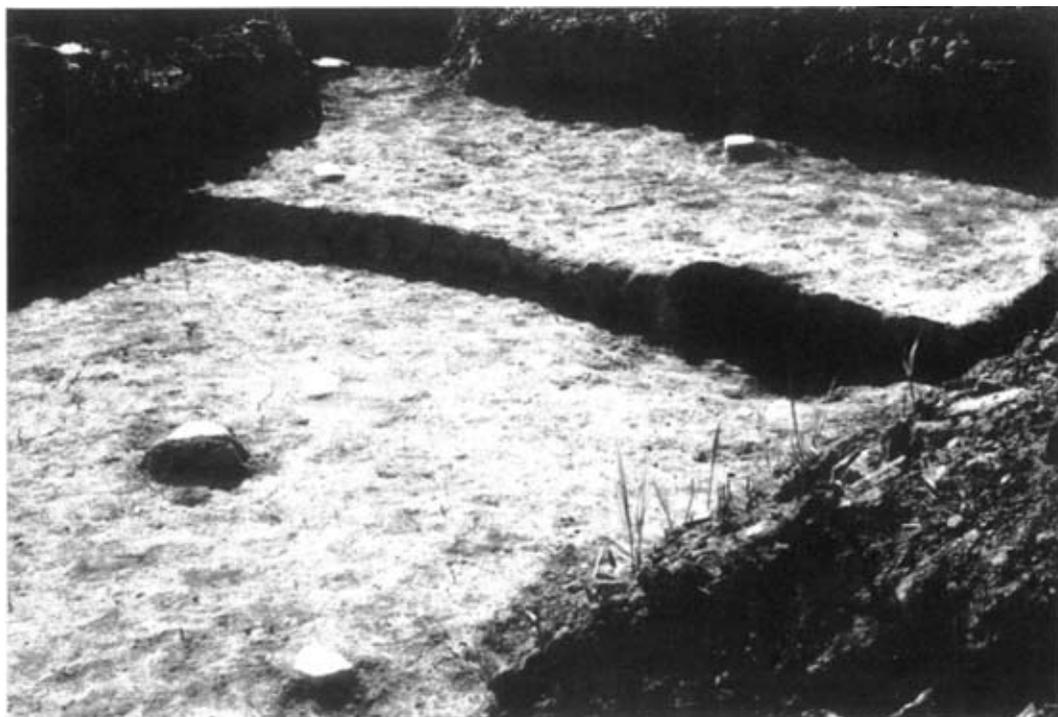
この他、中国から将来した青・白磁片や、墨書土器はこの遺跡の性格を究明する上で貴重な資料となる。遺物の出土状況は B 地区の様相と似ており、この周辺が平安～室町時代の集落の中心的な位置を占めていたことが窺える。

中世村落のなかでも、鎌倉時代の建物跡を多数検出した郡山遺跡群内末野 C 遺跡では、山茶碗・山皿が主体を占める中で土師器類は微量で、大木ノ輪遺跡とはまた違った出土状況を示している。

同じように、伊勢湾に面した中世村落の遺跡においても、出土遺物に少しずつ差異が認められ、こうした要因は、時期的なもの、「村」そのものの構造の違いによるものか、今後出土遺物の分析・検討により、中世村落の復元が更に進んでいくものと考えられる。



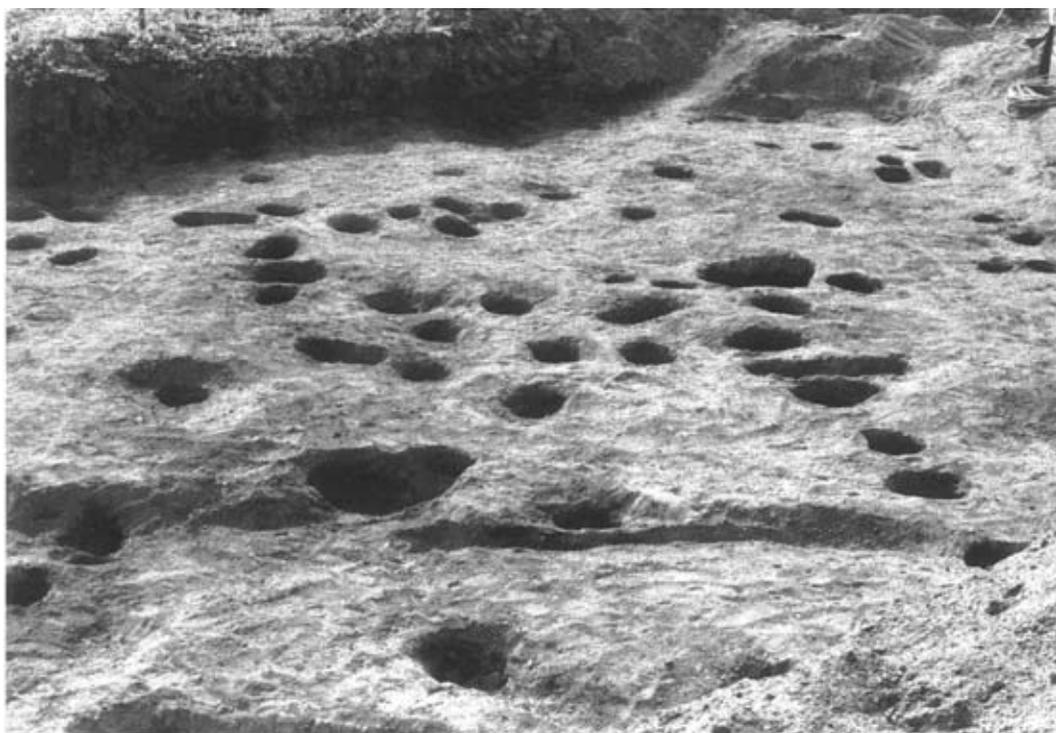




A 地区 建物跡



B 地区 全景



B地区 建物跡



遺物出土状況

遺跡名	彌生時代		古墳時代		奈良時代	平安時代	鎌倉・室町時代											備考		
	前期	後期	前期	後期			山茶椀	山皿	清白磁	天目	甕	鉢	土師器				磁石		土錘	
					皿	杯							鍋	羽釜						
天ノ宮遺跡	●		◎	●	○	○	○	○		●								○	○	・溝跡 ・土壇
神大寺遺跡			◎	◎		○	○	○		●	●	○		○	◎	●	○			・溝跡 ・土壇
大木ノ輪遺跡	A地区	○	○	○	○		○	○						○	○	○	○	○	○	・掘立柱建物跡・土壇 ・井戸跡 ・溝跡
	B地区	○	○		◎	◎ 緑釉 灰釉	○ 墨書	○	○					◎	○	◎		○		・掘立柱建物跡・土壇 ・井戸跡 ・溝跡
	C地区			◎	◎	○ 緑釉 墨書		●						●	●	●		●	●	・掘立柱建物跡・土壇 ・井戸跡 ・溝跡
	道路調査区		○			●	◎ 墨書	◎	○		●			○	○	●		○	○	・掘立柱建物跡 ・溝跡

付表1 大木ノ輪遺跡周辺出土遺物一覧表

- 文献①天ノ宮遺跡 「昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告」  
三重県教育委員会 1981
- ②神大寺遺跡 //
- ③大木ノ輪遺跡 「昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告」  
三重県教育委員会 1980

---

市道鈴鹿楠線改良工事に伴う  
埋蔵文化財調査概要報告  
－大木ノ輪遺跡－

鈴鹿市遺跡調査会

---